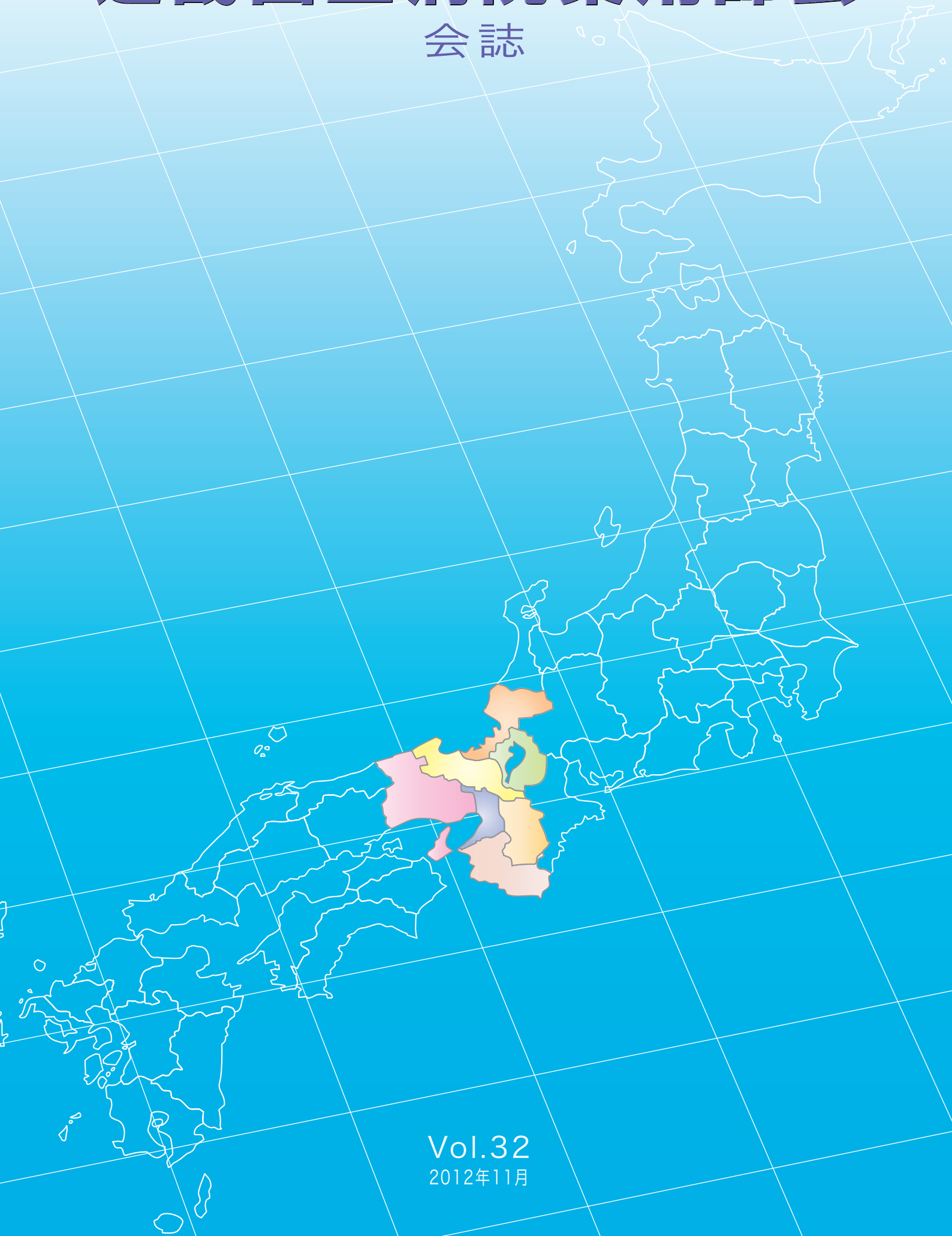


近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.32
2012年11月

目 次

薬剤科紹介.....	2
滋賀病院 鈴木 晴久	
トピックス) 大阪医療センターと大阪薬科大学との学術交流協定の締結について.....	5
学術交流協定の締結に思う.....	6
大阪医療センター 小森 勝也	
業務検討委員会主催講演会報告.....	7
兵庫中央病院 平木 精一	
第 22 回日本医療薬学会年会に参加して.....	9
国立循環器病研究センター 中野 一也	
第 14 回日本医療マネジメント学会に参加して.....	11
南和歌山医療センター 辰己 晃造	
病院薬剤師になって.....	12
和歌山病院 竹原 健次	
南和歌山医療センター 渡辺 雄太	
国立循環器病研究センター 今西 嘉生里	
地区会報告.....	16
奈良医療センター 松本 勝好	
趣味のページ) 年相応になってきた趣味.....	17
やまと精神医療センター 黒田 友則	
編集後記.....	19



薬剤科紹介

独立行政法人国立病院機構 滋賀病院

病院概要

<沿革>

昭和 16 年 2 月八日市陸軍飛行連隊病院として創立されました。昭和 20 年 12 月「国立八日市病院」として厚生省に移管された。平成 12 年 12 月国立療養所比良病院と統合され、病床数 250 床 循環器病、呼吸器疾患、エイズに関する専門的医療を行う「国立滋賀病院」としてスタートし、平成 16 年 4 月に独立行政法人に移行し施設名称変更「独立行政法人国立病院機構 滋賀病院」となり、現在に至る。

<東近江総合医療センターとは>

平成 22 年 1 月に策定された滋賀県地域医療再生計画（東近江医療圏）及び平成 22 年 6 月に策定された東近江市病院等整備計画により、当院は東近江市立 2 病院との集約化、再編により、新たに（仮称）独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センター（以下「中核病院」という。）として 220 床から 320 床に増床した地域の中核病院として平成 25 年度に生まれ変わる計画が決定された。

このことは、この中核病院内に地域医療を担う医師に対する教育・育成等に関する研究を行い地域医療を組織的に確立することを目的とした滋賀医科大学の寄附講座（総合内科学講座 総合外科学講座）が教育活動拠点として設置され、地域に視点を置いた医療機関としての体制を強化し、同時に、政策医療をはじめ地域医療を充実するため救急受け入れ体制を強化して急性期医療に対応していくものである。



東近江総合医療センター 地域医療再生計画モデル
(イメージ図)

<環境>

- ・ 滋賀病院がある東近江市は、近江牛、焼きたてのバームクーヘンが食べられるクラブハリエに、この土地ならではのクラブハリエのバームクーヘンの切れ端を摂取して育ったバームクーヘン豚がマニアには有名である。

- ・ 病院は名神高速八日市バス停より 5 分の場所に位置し、京都・大阪・奈良からの通勤者も多く、名鉄バス・JRバスの乗客の半数以上が滋賀病院スタッフになっている日もある。

[薬剤科紹介]

薬剤科スタッフは現在、薬剤科長、副薬剤科長、製剤主任、薬剤師 3 名、事務助手 1 名計 7 名で構成している。

臨床活動報告

2011 年度の業務実績は院外処方発行率 97.7%、薬剤管理指導件数 1010 件、入院無菌調製件数（化療+TPN）2434 件、外来化学療法調製件数（加算 1） 570 件、医薬品安全性情報報告件数 5 件、プレアボイド報告件数 2 件となっている。

2012 年度は 10 月現在、院外処方箋発行率 97.8%、薬剤管理指導件数 814 件、入院無菌調製件数（化療+TPN）1241 件、外来化学療法調製件数（加算 1） 333 件、医薬品安全性情報報告件数 1 件、プレアボイド報告件数 30 件となっている。

調剤業務

当院はまだ手書き処方であるが、インシデントや医師の仕事量の軽減のため、内服定期処方手入力によりデータベース化している。注射に於けるの払い出しは、過誤防止のため 1 日分毎の払い出しをおこなっている。

無菌製剤

無菌室で依頼された高カロリー輸液・抗癌剤の処方監査・調製を実施している。化学療法小委員会を設け、レジメン（治療内容）を審議し、承認、登録を行うことにより、安全性をはかり、外来化学療法加算 1 を算定している。滋賀病院作成オーダーリングシステムを使用し、過誤防止を図っている。

医薬品管理業務

購入した薬剤の品質について患者に交付されるまで、薬剤師が専門的な知識を基に管理している。医師の増加に伴い、採用医薬品数が 2010 年度 892 品目と比べて 2011 年度 965 品目と増加している。後発品比率は 23.9%から 23.2%と、若干減少したが、後発品購入金額比率は 14.8%から 17.1%と増加している。2012 年 3 月に大幅に後発品に切り替え、2012 年 4 月現在後発品比率は 31.2%となった。

医薬品情報管理業務

薬剤についての多くの情報を収集・評価し、必要なものを医師やそのほかの医療スタッフに伝達することにより患者の安全性を確保している。また、万一薬剤で何か不具合が生

じた時には、発生した情報を厚生労働省に報告し、副作用の拡大防止を図っている。

薬剤管理指導業務

入院されている患者へ直接薬剤の効果や用法、副作用等の注意点を説明し、アドヒアランスの向上を目指している。また、医師、看護師、コメディカルへ医薬品の適正使用のための情報を提供している。指導件数は、薬剤師の減少に伴い少し減少したが、前年度と比べ質に関してはクリティカルパスの参加、糖尿病教室の参加、講義内容の調整、化学療法の副作用防止等の向上をはかることができ、少しずつではあるが、チーム医療に参画している。退院指導に関しても地域密着型の指導をめざし、お薬手帳の有効利用に取り組み退院指導件数も上昇している。

受託研究業務

現在、治験を立ち上げるべく準備中であり、治験管理室は来年度初めに完成予定である。受託研究業務として医薬品の特定使用成績調査・使用成績調査・EBM 研究と、他の業務とを併任しながらおこなっている。2011 年度は機構本部 EBM 研究の 5 課題に進行し、看護部・検査科の協力を得ながら、症例件数は増加している。2012 年度は 3 課題が終了し、2 課題が看護部・検査科の協力を得て進行している。

地域・薬剤師会等との連携

- ・ 滋賀医科大学との連携：ICT、癌勉強会、呼吸器フォーラム等
- ・ 滋賀県薬剤師会、東近江市薬剤師会との連携
- ・ 地域連携：「三方よし※¹糖尿病研究会」への参加

※¹ 三方よし：「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」の三つの「よし」。売り手と買い手がともに満足し、また社会貢献もできるのがよい商売であるということ。近江商人の心得をいったもの。三つのよしを「患者よし、機関よし、地域よし」として名づけた。

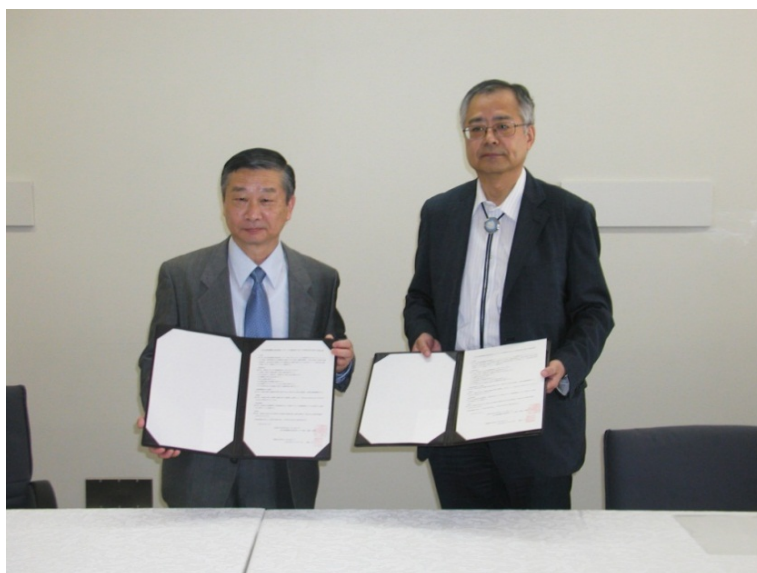
（文責 鈴木晴久）



（筆者、後列右より 2 番目）

【トピックス】

大阪医療センターと大阪薬科大学との学術交流協定の締結について



大阪薬科大学 藤田芳一学長(左)、大阪医療センター 楠岡英雄院長(右)

平成 24 年 8 月 17 日、大阪医療センターと大阪薬科大学は、教育・研究活動および医療等の全般における交流・連携を推進し、相互の教育・研究や医療技術等の一層の進展と地域社会および国際世界の発展に資することを目的として、学術交流に関する協定を締結しました。

主な連携事項は、教育・研究・診療における相互支援、学生・大学院生および教職員の相互交流、学術会議の共同開催、薬剤師のキャリアアップ教育などです。

また、今回の協約締結に関して、調印式出席者の中より小森薬剤科長からのコメントをいただきましたので、次ページに掲載させていただきます。



学術交流協定の締結に思う

大阪医療センター 小森 勝也

「井上理事長 ご無沙汰しています」「小森君か、若いなあ」との声に、調印式前の緊張も解け、思わず心が和いだ。国立大阪病院時代に井上院長と巡り会えた邂逅の喜びが、脳裏をかけめぐる。「小森君、薬剤師の存在をもっとアピールしなさい。患者から見て、医師と見分けがつかないとだめだ。いっそ白衣の色を変えてみたら・・・」。その一言で薬剤師の装いは、白衣からブルー衣へと変身したのである。当初、重たく感じた「ブルー衣」は風を起こし、活性化を生み出す心の坩堝となった。

医療の高度化、複雑化に伴う業務の増大が進む一方で、チーム医療の重要性が改めて認識された。今や薬剤師が主体的に薬物療法に参画することは、非常に有益であると指摘されている。今年度の診療報酬改定では病棟における一連の薬剤業務が評価され、病棟薬剤業務実施加算（ホスピタルフィー）の新設に繋がった。まるで呼応するかのように、6年制の養成課程を修了した第一期生がさっそうと医療現場に入ってきた。希望に満ちており、とても楽しみだが一抹の不安もある。

そんなとき、大阪薬科大学との学術協定という、ビッグニュースが突如、舞い込む。心が躍った。今回の協定は、お互いが専門とする資源を活用し、大学院生・学部生、および教職員との相互交流を推進することで、教育研究・医療水準の向上と地域社会の発展に資することを目的とするもの。薬剤部門として、まずは臨床現場を提供したい。双方向から見る薬剤業務の実態は、臨床薬学教育の推進に大きく寄与するであろう。公開講座の共催や共同研究の立ち上げなど、連携への思いはさらに膨らむ。熱き思いが詰まったブルー衣のチーム力、大学との交流を深めていくなかで大きく飛翔させよう、と私は思う。



業務検討委員会主催講演会報告

兵庫中央病院 平木 精一

日 時：平成 24 年 10 月 20 日（土）14:00～16:30

場 所：KKR ホテル大阪 2 階 星華の間

参加人数：141 名（会員 110 名、非会員 31 名）

会員講演

演題「ICT における薬剤師の取り組みと課題」

演者 中蔵伊知郎（大阪医療センター）

山下大輔（循環器病研究センター）

座長 川戸順之（姫路医療センター）

特別講演

演題「PMDA が提供する医薬品情報の利活用

～より良い情報提供のために～

演者 鈴木麻衣子（独立行政法人医薬品医療機器総合機構安全第一部安全性情報課 主査）

座長 砂金秀美（和歌山病院）



今回の講演会は業務検討委員会の主催で、会員講演及び特別講演の二部構成で開催されました。

最初に「ICT における薬剤師の取り組みと課題」という演題で、会員施設からの報告が二題出されました。両施設とも、ICT における薬剤師の役割の重要性と、その実際の活動を簡潔かつわかりやすくご発表いただき、とくに未だ薬剤師の参加及びチームへの貢献度が不十分と感じておられるような施設にとっては、大いに参考になったと思われます。また両施設では、薬剤師として、さらに発展的な役割を果たすための試みも実践されておられ、発表後の質疑応答も活発に行われました。

特別講演は PMDA 安全第一部安全性情報課の鈴木先生により、主に組織全体の役割とホームページによる情報提供の詳細を講演いただきました。

PMDA による活動には、われわれ会員は常日頃から接してはいるものの、活動の全貌を理解しているとは言い難いようです。しかし今回の先生のわかりやすいご説明により、安全性情報を中心に、健康被害救済制度に及ぶその活動の重要性を再認識できました。

また具体的なホームページの利用方法も詳細にご説明いただき、われわれの今後の日常業務への利用もますます増えることと思われます。常に医薬品・医療機器における最新の情報を手に入れることができる、「PMDA メディアナビ」への登録も必須です。

事前に配布された講演資料はかなり大部のもので、持参するのに皆さんご苦勞されたようですが、当薬剤師会のホームページにデータはアップしてあります（「ファイルデリバリー」中、「業務検討委員会」の項）。この資料は今後 PMDA 発の情報を利用する上で、マニュアルとして活用可能と思われますので、今回の講演に参加できなかった会員の方にもご一読をお薦めしておきます。

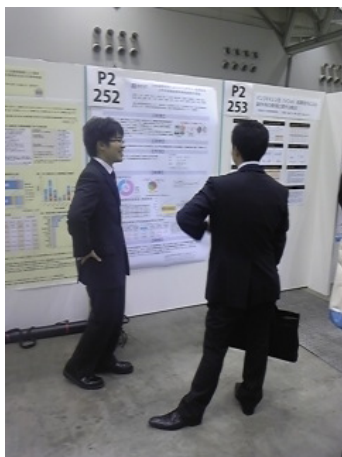
第 22 回日本医療薬学会年会に参加して

国立循環器病研究センター 中野 一也

平成 24 年 10 月 27 日（土）～28 日（日）、新潟市の朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）・ホテル日航新潟で第 22 回日本医療薬学会年会が開催されました。今回、私は年会に参加及びポスター発表をする機会を得たため、報告させていただきます。

平成 24 年 4 月の診療報酬改定で、病棟薬剤業務実施加算の新設に伴い、数多くの関連する特別講演等が企画されていました。また、ポスター発表でも、常駐業務を開始している施設において、その現状と課題について発表されており、大変注目されていました。私は、今年 6 月より乳幼児・周産期病棟へと担当病棟を異動したため、日々病棟において薬剤師として何が求められているか考えていました。担当病棟関連の発表はないかと探していたところ、ポスター発表で「産科病棟への薬剤師常駐の取り組み」という演題で医師、看護師など他の医療スタッフからの薬剤師に対するアンケート結果が発表されていました。アンケートでは、妊娠中の薬について女性薬剤師の方が相談しやすいとの意見も多くみられると報告されており、男性薬剤師としてどのようにアプローチしていくか、また自分にしかできないことを探していかなければならないと感じました。

シンポジウムでは、がん、HIV 感染症、感染制御など専門領域のテーマから、東日本大震災時における急性期の医療支援についてなど、様々なテーマが設定されていました。その中で、「医療薬学会研究の成果を論文に投稿しよう！」というテーマで、これから論文を作成しようとする薬剤師を対象に、論文を作成する上で演者が心掛けている点や苦労している点について、若手薬剤師の目線も紹介したシンポジウムが開催されており、これから論文投稿を目指す薬剤師にとって、大変参考となると感じました。私も、これまで論文投稿はかなりハードルが高いものと敬遠しておりましたが、これからトライしていきたいと思いました。



今回、「LVAS 装着患者におけるアミオダロン使用状況と甲状腺機能異常発現頻度の調査」という演題で、ポスター発表を初めてさせていただいたのですが、様々な施設の先生方と質問を通じてコミュニケーションを取ることができました。これまで、何度か学会で口頭発表はさせていただいたのですが、口頭発表の時とは違い、1 対 1 で議論できるため、LVAS や心臓移植といった他の施設ではあまり聞きなれない用語にも興味をもたれた先生からも、心臓移植にあたってどのような薬剤管理をしているかなど、演題の内容とは直接関係のない質問もいただきました。

学会ではいろいろなテーマで研究発表が行われており、日々の業務の中で、当センターでもできる研究がもっとあると気づくことも多く、研究のヒント

探しにも最適でした。そういった意味でも学会に積極的に参加することは、大変意義のあることだと思いました。

最後に、新潟市はあまり宿泊施設が多くない土地であったため、飛行機や宿泊施設の予約には苦勞しました。特に帰りの飛行機が確保できなかったため、帰りは 5 時間以上かけて新幹線で帰ってきました。予約は早めにすべきだと実感しました。新潟で食べた魚や日本酒はとても美味しく、その地方の名物を食べるのも、学会に参加する 1 つの楽しみだと思っています。

第14回日本医療マネジメント学会に参加して

南和歌山医療センター 辰己 晃造

2012年10月12(金)～13(土)に長崎県のアルカス SASEBO、ホテルリソル佐世保、レオプラザホテル佐世保、佐世保市体育文化館の4会場で第14回日本医療マネジメント学会が開催され、参加しましたので報告致します。

今回、私は「がん性疼痛オキシコドン徐放錠導入パスの作成と今後の課題」という演題でポスター発表を行いました。

本学会は、クリティカルパスを中心に、医療安全、医療連携、医療の質の向上など幅広い分野において情報発信を行っています。地域医療は超少子高齢化社会の到来のなか、医師・看護師の不足・偏在化により大変厳しい状況にあり、去る3月11日の大災害はこれら地域医療の問題点をよりあらわにし、さらに新たな課題を露呈しております。災害医療への対応、医療の情報化・明視化、地域医療機関における連携強化や多職種によるチーム医療、医師をはじめ医療人の不足解消、人材育成、役割分担などが問題となっています。今回のメインテーマは『地域医療の復興と絆 ～チーム医療と地域連携をさらに進めるヒューマンネットワーク作りを目指して～』でした。

当院緩和ケアチームからの演題として発表したところ、他施設からの質疑も多く、再検討とする課題も見出されました。今回の学会では例年以上に発表演題も多く、テレビショッピングで有名な株式会社ジャパネットたかた 高田 明社長の招待講演も企画されていました。

病院内の多職種が多様なマネジメントを行っていることに感銘を受けることもあり、発表はもちろん、参加に意義を感じられる学会となりました。これからもチーム医療と地域医療などにも視野を広げて業務に取り組みたいと思います。



ポスター会場（佐世保市体育文化館）



ポスター発表

病院薬剤師になって

和歌山病院 竹原 健次

私が和歌山病院の薬剤科に勤務させて頂いて4ヶ月がたちました。夢中になって仕事をしているうちに過ぎたあっという間の4ヶ月でした。そんな中で自分がどれだけ仕事が出来ようになったかを考えるとまだまだ勉強しなければならないと思います。

病院薬剤師になるからにはまずはジェネラリストになりたいと思いました。その為、すべての業務をこなせるようにならなければなりません。

病院薬剤師の業務は調剤、発注、ミキシング、病棟業務、オーダーリングシステムの作業、DI業務など多岐にわたります。まずは計数調剤から始まりました。次に計量調剤です。処方箋の見方を教えて頂き用法用量もだんだん覚えていきました。基本的なことですが、一番大事な基礎を学びました。発注に関しては知らないことだらけで、足りなくなることもありました。しかし、今では薬剤の動きをある程度予測して発注出来る様になりました。ミキシングは最初難しいと感じて逃げていました。しかし、このままではいけないと思ったのと、強く勧められたこともあり強化月間を作って頂きました。そのお陰で和歌山病院で行うミキシングはほぼ行うことができるようになりました。オーダーリングシステムについてはまだまだ勉強中です。しかし、これから徐々に慣れていく予定です。DI業務を任されているのですが、今は何が必要で何が不要かわかりません。しかし、これから試行錯誤しながら学んでいこうと考えています。

また、9月から実習生が来たのですが、それも励みになりました。実習生に負けないように何を聞かれてもできるだけ答えられるようにならないといけないというプレッシャーもあり自分も更に成長できたと思います。

和歌山病院の薬剤科に勤務させて頂いた事で病院薬剤師業務の全体像を把握することが出来たので、最初にこの病院で働けてよかったとしみじみと感じます。働いて来た中でわかった事は、実践が一番勉強になるということです。机の上で学ぶことも基礎となりますが、すぐに業務には結びつきません。しかし経験を重ねることで双方を結びつけることが出来ます。最初はなかなか結びつける事ができませんが、時間がたてばできる様になります。また、和歌山病院の薬剤科で働いていて感じたことは、出来ない事へ向き合っていくことの大切さです。

働くことで人としても成長できたと思います。まだ一人前になっていませんが、これからは和歌山病院の薬剤科の一員として、また病院薬剤師として認められるように仕事に励みたいと思います。

病院薬剤師になって

南和歌山医療センター 渡辺 雄太

私が南和歌山医療センターで薬剤師として勤務し始め、半年以上が経ちました。日々の業務にも慣れてきましたが、まだまだ知識が足りずDI室と病棟、調剤室を往復しています。特に、薬の副作用の種類について知っていても、患者さんが気にする発現頻度、発現時期についての知識が足りないことに気づかされました。また、今年度から病棟薬剤業務実施加算が導入されたことで病棟に滞在する時間が多くなり、中でも看護師からの薬に対する疑問は、薬の作用機序など理論的なことから配合変化など、すぐに患者さんに適用されることなど聞かれる内容は幅広く、私が気にしていなかったことも聞かれるため、他の職種との関わりで学べることの多さを実感しています。

病棟での服薬指導やチーム医療への参画、糖尿病教室など元々あった薬剤師としての職能を発揮できる場面に病棟薬剤業務が加わったことで、今まで以上に患者さんに関わる機会が増え、それにより求められる知識も増えてきていると感じます。また知識も試験のような一つの答えばかりでなく、いくつもの答えを経験によって組み合わせた知識が求められることもあり、まだまだ知識も経験も足りない私はまだまだ薬剤師としての働きが出来ているとは言えない状態です。しかし、そんな私でも患者さんや他の医療従事者にとっては『薬について聞ける人』として質問されるため、日々の業務は仕事であると同時に勉強にもなっています。

「国家試験の合格はゴールでなくスタートであること」、「薬剤師は日々勉強」を頭で理解していただけた学生時代とは異なり、身を以て経験した現在は、明日の為に今日何が出来るかを考え、また先を見るだけでなく、薬剤師免許を手にとったとき感じた責任の重さを忘れずにこれからの業務に取り組みたいですと思っています。

知識も経験も不十分でご迷惑をおかけすることもあると思いますが、これからもご指導よろしくお願いいたします。

病院薬剤師になって

国立循環器病研究センター 今西 嘉生里

今春、国立循環器病研究センターに採用され、6ヶ月が経過しました。業務内容は主に調剤、TPNの無菌調製、病棟業務です。病棟業務は10月中旬から始まったばかりなので、今回は調剤室で感じたことについて述べたいと思います。

薬剤師になってまず実感したのは自分の力量不足でした。慣れないうちは正しく調剤するだけでも大変な上に、用法用量が個々の患者にとって適切かどうかを判断しなければなりません。しかし、自分の知識は乏しく、処方を見ても妥当性を判断することができません。実習生のころは、「わからないことはじっくり調べろ」と言われていましたが、社会人となった今は、調剤室スタッフの一員として仕事を進める必要があります。調剤のたびに延々と考え込んでいることは許されず、幅広い知識を身につける必要があると感じました。

1ヶ月もすると、調剤の正確さとスピードとの両方を求められるようになり、調剤の仕方を工夫する必要がありました。早く仕事を終わらせるために、スピードだけを重視していたこともありましたが、やがて、一人でやみくもに動いてもだめだと気づきました。重要なことは、自分の仕事を進めることではなく、調剤室の仕事を進めることだと思いました。

全員で仕事を円滑に進めるためには、何が重要かを考え続けたところ、それは「ほうれんそう（報告、連絡、相談）」だという結論に至りました。一人で調剤室を切り盛りするなら自由に動いて大丈夫でも、集団で仕事をする場合は、申し送りを確実に行って情報共有しないと仕事が滞ることを、数多くの失敗から学びました。あるときは「社会人をなめるな」とこっぴどく叱られ、学生気分から脱却する必要を感じ、社会人としての責任とは何かを考えるようになりました。自分で勝手に判断することは、薬剤師としても社会人としても致命的なことだと注意していますが、まだまだ毎日が反省の連続です。

最近、「調剤室を仕切れるくらいに視野を広くもて」と言われます。一緒に仕事をしていて働きやすいと感じる人は、確かに視野が広く、こまめに周囲に声を掛けて、全体の進行状況を把握していると思いました。そうやって最優先すべきことを判断し、人を動かしていると思いました。調剤室では、「調剤室を仕切れるくらい調剤業務に習熟すること」を目指して頑張ろうと思います。

仕事をしていると分からないことが多いので、業務終了後に勉強すべきことは数多くあります。学生時代のテストの点をとるための勉強ではなく、現場で使える知識を身につけることは私にとって難しく、自己学習はともすると自己満足に終わってしまいます。薬剤師として、自分のためではなく、患者さんのために役立つ知識を身につけなければ意味がないと思います。

薬剤師として働くということは、学生時代に考えていたよりも責任の重いものであり、薬剤師に必要な知識には終わりが無いのだと知りました。薬剤師としても社会人としても基本的なところで足踏みしているような毎日ですが、地道に努力して、一步一步確実に成長していきたいと思います。



地区会報告

奈良医療センター 松本 勝好

奈良地区

日時：平成24年11月14日（水） 19：00～21：00

開催場所：奈良市内

参加人数：やまと精神医療センター 3名 奈良医療センター 6名
計 9名（100%） 会員数 9名

内容

I、各施設からの現状報告

II、薬学6年制長期実務実習について

III、近畿国立病院薬剤師会の組織について（現状と将来）

IV、親睦会



～ 趣味のページ ～

年相応になってきた趣味

やまと精神医療センター 黒田 友則

やまと精神医療センターの黒田です。趣味のページの第一回目に選んでいただき、ありがとうございます。

今回、依頼をいただき、「趣味か・・・」と過去を振り返って考えてしまいました。というのも、2歳になる娘がおりまして、目を離すわけにもいかず、どうしても視線は娘と娘が興味を持つ対象にいついてしまいます。初めは何をするのか心配しながら見ていましたが、ゆとりが出てくると、娘の行動を見て昔の自分を思い出したり、また新たな発見もあり、趣味の一部になりつつあります。その一方で、育児で遠ざかっている今までの自分の趣味はと考えると次第です。今まで趣味を聞かれたり、自己PRで書いたりすることは幾度となくありましたが、その度にスキーや読書とごく一般的な趣味を挙げていたように思います。その時は自分の中で占める割合が多かったのですが、嘘ではないのですが、これから書くことはなかなか共感してもらえることが少ないので、あまり触れてきませんでした。それは、「自然や時の流れ、歴史を感じられる対象を探すこと」と「ウインドウショッピング」です。

前者についてですが、私は大阪市内のほぼコンクリートに囲まれた街で卒業するまでの20数年を過ごしていたのもあり、自然というものに興味を強く持ったのだと思います。小さいころから空に浮かぶ雲や夕焼けを眺めたり、神社仏閣を訪ねたりすることは大好きでした。雨音や土のおいおも好きですね。こんなことを言うと年よりくさい、年相応の趣味とかあるやん？とか言われるのです。空や山の景色は季節によって様々で、木々どれひとつをとっても同じものはありません。そこに昔の建築物、特に神社



自宅で撮影したダブルレインボー
主虹(左)と副虹(右)ですが、明るさが違い、色の見え方が逆です。

仏閣は自然に調和しながら建てられており、訪れることで自然の偉大さと自然との調和を考えながら建築した人とその技術に感動し、そしておいしい空気を吸って元気になるんです。近年では風水的にパワースポットとか言われて一般的になりましたが、いわゆる「癒される、エネルギーをもらう」わけです。立ち止まったり、腰掛けたりしてしばらくぼーっとしてることがありますね。そんなこともあって、自分の家にも庭が欲しいなとよく思っていました。おかげさまでもつことはできました。その庭は自然を感じる立派な庭・・・ではなくて、当初は粘土質で水はけの非常に悪い庭でした。予算をそちらに回さず、自分で何とかしようと思ったので（家族にはすいませんなんです）。そのおかげですが、もうひとつの趣味「ウインドウショッピング」がより楽しくなりました。

「ウインドウショッピング」は服とか見て回るものではなく、対象の店はホームセンターです。一人で行くとほぼすべてのコーナーを見て回るので半日は費やします。独身の頃は仕事帰りに2、3件ハシゴすることもありましたし、旅行先でもホームセンターを見つけてわざわざ寄ることもあります。買いものに行ったけれども、思わしいのがなく、別の店に行くことはあっても、3件も行く人はなかなかないと思います。このことを話すと何作るの？とか見てどうするの？とか言われます。これ見たことあるとかどうやって使うんだろとか考えながら見るのが楽しいんです。地方のホームセンターは街にはない商品が数多くあるので、面白いですね。街中のホームセンターも大型店舗が増えて玄人向けの商品も増え、よくなりました。昨年に関西最大級のホームセンターができたのですが、そこにはまだ行っておらず、高速道路を運転しながら横目で何度も見てるだけです。家族で下見して、いつかは1人でじっくり見て回ることがささやかな夢です。今は回数や時間はめっきり減ってしまいましたが、家の庭にこれはどうかなとか考えながら見て回って楽しんでいきます。庭が最初から完成してたらこんな楽しみ方はなかったもので、私本人はよしとしています。問題の粘土質の庭は芝生の庭に大半が生まれ変わりました。我流なので、何度も手直しを繰り返しながらも、未完成の庭をより居心地のいいものにしていきたいです。

今年で36歳になりましたので、徐々に年相応な趣味に近づきつつあると思っています。自宅や勤務先の周辺には歴史的な遺跡が多く、少しずつ時間を作って散策したいなと考えています。

次回は大阪南医療センターの常倍翔太先生にリレーバトンを渡したいと思います。



病院近くの法起寺。秋のコスモスがきれいです。
夕方に見るのが一番好きです。
(写真:春日野奈良観光 H.P.)
<http://www.kasugano.com/kankou/hokiji/>

編集後記

- ♪ 寒さも一段と厳しくなり、早朝には氷点下を記録する地域も出てきているようです。皆さま体調は崩されていませんか。
- ♪ 今年のノーベル医学・生理学賞に山中伸弥教授が受賞されました。日本人のノーベル賞受賞は2年ぶりで、医学・生理学賞は1987年の利根川進先生の受賞以来、2人目の快挙となりました。iPS細胞を駆使した研究は難治疾患を治療する再生医療の実現が期待され、新薬開発へも貢献される分野でもあります。国立大阪病院（現大阪医療センター）にも在籍されたこともあり、受賞されたことは大変嬉しい思いです。誠にありがとうございます。
- ♪ 今月号より新コーナーとして“趣味のページ”の連載を始めました。薬剤師業務に一息入れ、リフレッシュされている会員の先生方のひとときを紹介していただく企画です。バトンリレー形式で繋いでまいりますので、バトンを受け取られた先生におかれましては、ご寄稿をよろしくお願いいたします。
- ♪ トピックスでは、大阪医療センターと大阪薬科大学の学術交流協定が締結され、教育、研究など多方面での交流を進めていく大学と病院との連携が紹介されました。
- ♪ 薬剤科紹介、薬剤師会講演報告、学会報告、新採用の先生の抱負、そして趣味のページと、いつものように充実した読みごたえのある内容となっています。今月もぜひ最後までご熟読ください。

(T. M)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

近畿国立病院薬剤師会会誌

第三十二号 平成24年11月発行

発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局

大阪市中央区法円坂2-1-14

(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 北村 良雄（京都医療）

編集 広報担当理事

廣畑 和弘（大阪医療）

広報委員

石塚 正行（大阪南医療）

玉田 太志（南京都病）

本田 富得（神戸医療）

朴井 三矢（京都医療）

中西 彩子（大阪南医療）

東 さやか（大阪医療）

奥田 直之（大阪医療）

宮部 貴識（大阪南医療）